

"遠近の景"から"まちニワ"へー”景観に調和する庁舎”

その昔、在原業平が都からこの地を訪れ、“遠近の里”と詠みました。
雄大な浅間の大地と人々の営みの対比が美しく映ったことでしょう。
浅間の大地に寄り添う大屋根、大屋根に寄り添う人々の営み”まちニワ”
ミクロとマクロが入子に連なる新しい庁舎の景色は、この風土の新しい”遠近の景”となります。



図 3-1. 軽井沢の景観に配慮し軽井沢モダンを展開する入母屋屋根

6 安心安全を支える防災拠点としての庁舎 堅牢な RC 造と親しみやすい木造

防災拠点としての主要部構造：庁舎配置は敷地の高い位置とすることで、水害を避け災害時の防災拠点とします。庁舎・複合施設主要部は堅牢な RC 造とし、その周囲を木造で繋ぎます。複合施設屋根については軽量な”山並みユニット構造”を用いて大スパンを実現し、避難施設として使用できる空間を目指します。

周辺施設と連携した避難施設としての複合施設：複合施設を避難所として利用可能、日頃から町民の親しめる施設とし、緊急時にもわかりやすい避難場所となります。隣接する軽井沢病院との連携を視野に、機動力の高い災害医療提供体制を提案します。

迅速な機能転換、支援活動が可能な計画：1階まちの縁側北東エリアを災害情報の発信拠点、南東エリアを町民相談窓口とし、来庁者の対応を円滑に行うことが可能な計画とします。執行部フロアである2階に災害対策本部を設置し、町長室・副町長室、防災倉庫と隣接させ機動的に連携します。

自家発電機の利用：災害時のライフライン復旧までのエネルギーバックアップシステムとして、最低3日間の自家発電設備に、自然エネルギー源・創造エネルギー源を併用することで使用可能期間を7日間以上に延ばします。

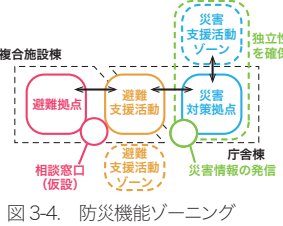


図 3-4. 防災機能ゾーニング

電源	自家発電機（燃料備蓄）、電源車、太陽光発電・蓄電池
水	受水槽、ペットボトル備蓄
便器洗浄水	雑用水ビッド貯留、雨水利用
排水	緊急排水槽、マンホールトイレ
空調	地中熱利用空調機、電気式空調機（非常用発電）、木質ペレットストーブ
炊出し	LPガス
※重要機器、屋外機器についてはSPD（避雷器）設置	

図 3-5. 防災計画表

7 環境に配慮した庁舎 2：構造計画 地場産材を取り入れた”山並みユニット構造”

地場産材を使用した木架構：森と庁舎の接点となる”まちの縁側”は、柱φ 30cm斜材φ 16cm以上の地場産材丸太を用います。明治時代からの植林が入替期になっており、30cm以上の材木（樹齢 60 年程度）が豊富です。前年の冬から準備ができれば、（春の水を吸わない）堅牢な丸太材が確保できます。地場産材を積極的に利用することで環境負荷を低減します。
構造要素としての浅間石ロッジ：浅間石（焼石）は構造材としての強さを持ちながら、軽石と同様に加工性に優れ現場加工も容易です。ダボ穴、補強金物を容易に要所へ取り付けすることで、地震時にも安全に支える構造とします。

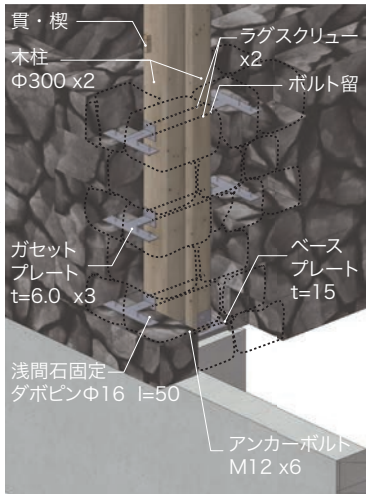


図 3-6. 浅間石補強のイメージ図

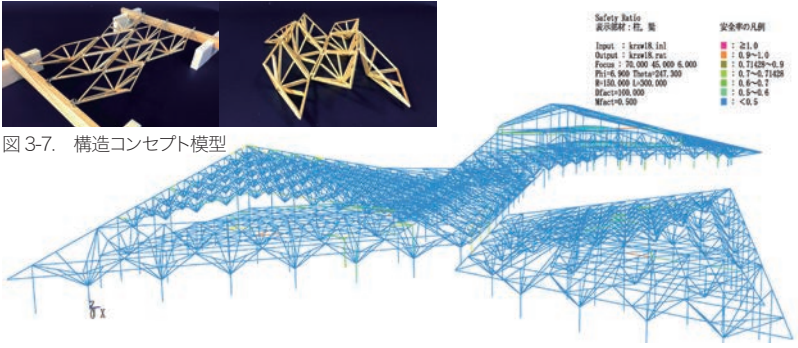


図 3-7. 構造コンセプト模型



図 3-8. 山並みユニット構造解析図

8 環境に配慮した庁舎 3：設備計画 環境に貢献する環境装置としての庁舎

ZEB ready の実現：自然エネルギー源・エネルギー効率の良い庁舎：BEMS(庁舎創造エネルギー源の活用、最新の設備計画により、高品質な室内環境の維持と同時に「見える化」、設備機器の稼働を自動で制し、庁舎の 50% 以上一次エネルギー消費量を削減し、ZEB ready の実現を目指します。

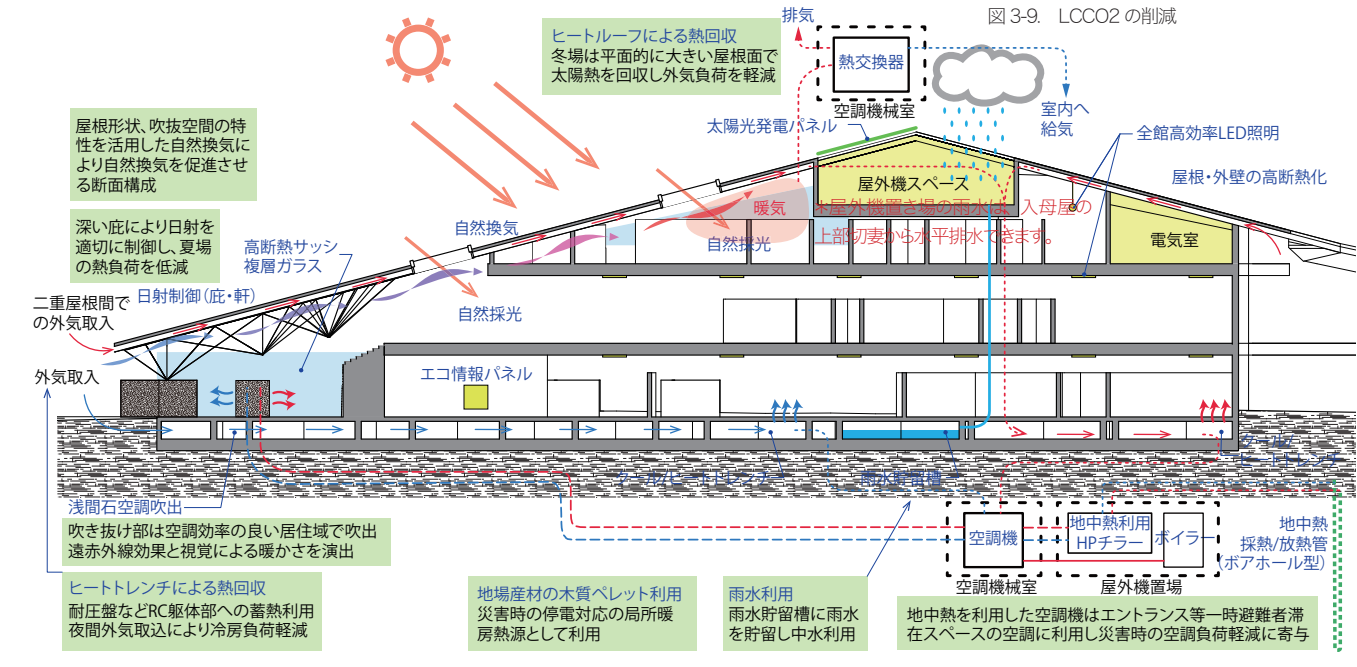


図 3-10. 設備断面ダイアグラム

5 環境に配慮した建築 / 国際文化観光都市としての品位と調和を備えた緑の中の庁舎 "軽井沢モダン"の継承と展開

「遠近の景」を生み出す屋根：新庁舎は中山道沓掛宿の末端にありつつ、同時にランドデザイン軽井沢モダンの 5 つの地区全体を表す建物を目指します。浅間の大地、湯川の流れ、離山など大きな地形の軸線。縄文からの連綿とつながる営みの景。明治以降 100 年の転生と日本を代表する保養地の文化。沓掛テラスや大賀ホールなど近年の景観形成への試み。浅間山への視線と調和しながら古きと未来をつなぐ屋根の形を模索しました。同時に豪雪の際に雪が溜まらない構造など安全面にも考慮しています。

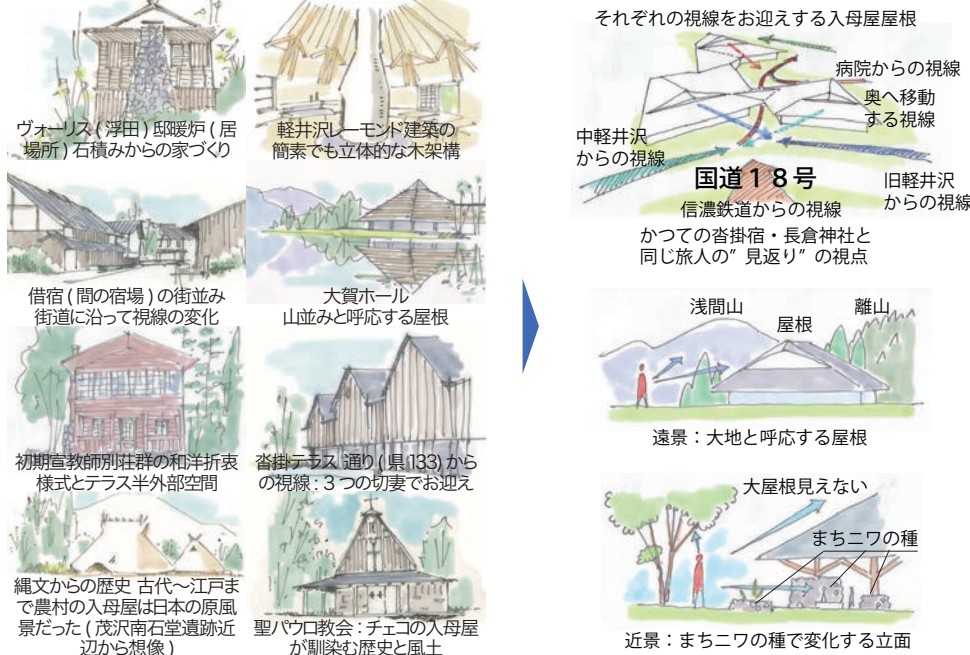


図 3-2. 軽井沢の風土にあった屋根を考える

図 3-3. 屋根の構成:「遠近の景」を生み出す屋根